

最初に同行した年少から小5のお子さんのグループ。子どもの場合は、鑑賞に集中するために、このように座って鑑賞する場合も。この日は、オランダの版画家・メスキータの作品が展示されていました。



アートを通して深く考える体験を 対話でつくる美術鑑賞

対話による美術鑑賞法をご存知ですか？ ニューヨーク近代美術館 (MoMA) で開発された
ウィーティーエス
V T S という方法で (5頁下段参照)、美術の知識に頼りません。

よく見て、自分の考えを言葉にしていく中で、観察力、思考力、

コミュニケーション力、答えのない問題を考え続ける力が身につくとされています。

具体的にはどんな取り組みなのか、美術館と小学校で行われた「対話型鑑賞会」を訪ねました。

美術館での鑑賞会

千葉県の佐倉市立美術館では、対話型の鑑賞会「ミテ・ハナソウ・カイ」が開催されています。3点の artworks を、約45分で鑑賞します。ミテ・ハナさん (ポランティアの鑑賞コミュニケーター。4頁下段参照) が進行役となり、子どもから大人まで絵についてお話ししながら鑑賞します (参加者が多かったこの日は子どもグループと大人グループに分かれました。5〜10人ほどのグループに、ミテ・ハナさん2名 (「ファシリテーター」と呼ばれる進行役と、他の来館者や途中からの参加者への案内や時間管理をする「サポート」役) の体制で行われます。

集合場所の美術館入り口ではグループごとにニックネームのネームタグをつけ、「好きな色」や「今朝の朝ご飯」など、気軽な自己紹介をし、展示室に向かいます。最初はお子さんだけのグループに同行。担当のファシリテーターはま

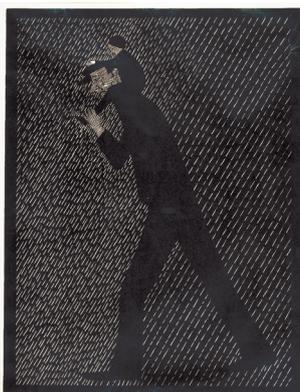


集合場所で「今朝は何を食べた?」。初対面の緊張がほぐれます。

この人は
病気のな
かなあ。

この人は様子が
おかしいと思ったのね。

どこからそう
思ったの？



サミュエル・イエスルン・デ・メスキータ
《父》1938年 Photo: J&M Zweerts



この絵の中で
どんなことが
起こっている？

ず事前に選んでおいた絵の前に立ち止まって、全員で近づいたり角度を変えたりしながら1〜2分じっくり絵を見ます。

ミテ＊ハナ 「この絵の中でどんなことが起こっている？」

参加者 「傘がなくて困っているみたい。」「ミテ＊ハナ 「雨が降っているのに、傘がなくて困っているように見えるのね。」

参加者の回答はすべて、ファシリテーターが一旦受け取り、わかりやすい表現に言い換えられることもあります。ファシリテーターは大きくくっつく言ったり言い換えたりしながら話題になっている部分を指し示して、さらに絵に注意を向けます。

参加者 「この人は病気のかなあ。」「ミテ＊ハナ 「この人は様子がおかしいと思っただのね。どこからそう思ったの？」

参加者 「顔がしましただから。」

根拠をたずねることでユニークな視点も皆で共有できます。他の人の見方がわかる面白い瞬間です。

この「どこから？」という問いは、VTSでよく使われる根拠をたずねる言葉で、この後も何度も登場しました。説明することがまだ難しいお子さんでも、作品の該当箇所を指摘するだけで答えられます。また日常よく使われる「どうして？」に比べて、心理的な負

担も軽く、作品そのものに集中できるようです。

ミテ＊ハナ 「他に気づいたことはありますか？」

手が拳がり、「お父さんが大変そう」「(さっき雨だと言われた)斜めの線が針みたいに見える。体に刺さっているみたい」「黒いところ(背景)には、家があると思う」「家じゃない方向に向かって歩いている気がする。奥さんとけんかしたのかも」。それぞれ発言を元に新しい対話が生まれました。

一つの作品を15分近くも見ましたが、時間は短く感じられました。自分で見て考え話すこと、他の人の意見を聞いてまた見ることが繰り返されるので、頭はフル回転。アートを介することでグループで共有する情報量は多く、観察力や思考力などが身につくと言われることもうなずきました。全3作品を鑑賞した後に入力されたアンケートには、「他の人の話を聞いて、違う想像ができた」「いろんな絵を見て楽しかった」「また来たい」「自分の意見を言えた」「自分が考えていなかったことを聞けて良かった」などの感想が寄せられています。

対話型鑑賞では、一つの正解はありませんから、どの意見も対等に受け入

ミテ・ハナソウ・カイ

月1回開催される対話型鑑賞ツアー。ミテ＊ハナさんの案内で、約45分間楽しくアートを鑑賞します。参加は無料。小さいお子さんから大人まで参加できます。



参加無料ですが有料の展覧会の場合には、観覧券が必要となります。展示を行っていない月は開催されませんのでご注意ください。

佐倉市立美術館 〒285-0023 千葉県佐倉市新町210
URL: <http://mitechana.com/activity/mitehanasoukai-2-2/>

ミテ＊ハナさん

佐倉市立美術館の鑑賞コミュニケーター。ボランティアで月1、2回活動。一般向けの「ミテ・ハナソウ・カイ」のほか、学年単位で来館する市内の小学生とおしゃべり鑑賞をしたり、展覧会「ミテ・ハナソウ展」の会場運営なども行っています。募集は数年ごとに不定期。さまざまな年代、お仕事の方が活躍中です。

眉の形から
そう見えました。

眉が下がっている
ことに注目して、
そう思ったのですね。



嘆いている
表情だと
思ったのは、
どこからですか？

大人のグループも笑いを交えながら、なごやかに対話中。大人の参加者は、抽象的な表現も用いつつ、気づいたことを言葉にしていました。

美術館を支える市民とNPO

れられます。個人の感じ方が尊重され、セラピーのような温かい雰囲気も。また自分と違った考えがあることはむしろ面白いことだと、体験としてわかるので、意見の違いを好意的に受け止める素地ができると思います。

ミテ*ハナさんの対話スタイルは、VTSの手法を元に、特に「聴くこと」を重視しているそうです。NPO法人のARDAが理論的・技術的なサポートを担当し、体験的な研修を繰り返し行ってから現場にデビューします。

鑑賞会終了後のミテ*ハナさんの「ふ

■ 対話型鑑賞の良いところ ■

作品をみる楽しさを 幅広く伝えられる

佐倉市立美術館学芸員 永山 智子^{のりこ}さん



佐倉市立美術館の対話型鑑賞会は、学校との連携を模索するなかで生まれました。これまでも来館者に向けたワークショップなどに力を入れていましたが、美術館に足を踏み入れたことのない児童を念頭に、より広い層に作品をみる楽しさを感じてもらおうと取り組み始めました。

学校との連携で実績のあったARDAさんと構想を進めて、2014年にミテ*ハナさんの募集を始め、現在1~4期生が活動しています。皆さん熱心で、自主的な勉強会も盛ん。大人の部活といった雰囲気でも活動されています。また高齢者施設へのアウトリーチ活動など、ミテ*ハナさんの発案で広がった活動もあります。

一般参加の「ミテ・ハナソウ・カイ」とは別に、市内の小学生を美術館に招いて行う鑑賞会や出前授業も、当初から行っています。学校の先生からは、普段の授業であまり集中できなかったお子さんがすごく生き生きしていたという声も寄せられます。反対に日頃成績の良い子が話せなくなる場面もあるとか。正解・不正解のない対話型鑑賞では、自分の感じたことを言えば良いわけですが、それを抑えて正解を探す癖がついているお子さんは、とまどってしまうのかもしれない。この傾向は高学年ほど強いようです。

アートに接することで、自分が心から感じることを、考えることを受け入れてくれる世界があることに気づいてくれるといいなと思います。またこうした活動を通じて、美術館やアートに対するイメージがもっと身近なものに変わってほしいと期待しています。



絵を見る位置に決まりはないそう。対話をしながら位置を移動することも。

りかえり」では、どのような視点で鑑賞会を進めていたのかを知ることができました。驚いたのは、他の人の発言をさえぎることなくなごやかに、大量の情報交換ができていたことです。鑑賞

ヴィーティーエス
V T S

Visual Thinking Strategies

ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ

1980年代からニューヨーク近代美術館 (MoMA) で研究開発され、学校教育現場を意識して進化させた美術鑑賞法。よく見て考え、お互いの意見を聴き、自分の気持ちや考えを言葉にすることで、観察力や思考力 (論理的思考力や批判的思考力、創造的思考力)、コミュニケーション力などが育つと言われています。

作品の選び方、途中からの参加者や他の来館者への目配り、印象的だった対話、判断に迷った点、他のメンバーの良かった点など細やかに取り上げられていました。メンバーは一般の市民の方ですが、対話の訓練を重ねたことで、フラットな関係性づくりや短時間でうまく話す能力も養われたのかもしれない。

また、言葉尻ではなく発言の本質を捉えることや、相手の発言を待つことなど、対話型鑑賞の研修で学んだ視点を、子育てや職場の人間関係の中で思い起こしている方もいらっしゃいました。対話型鑑賞は支える側にとっても、発見のある活動として根付いているように感じました。

小学校での鑑賞授業

学校でも対話型鑑賞が注目されています。小学校との連携事例として、今回は神奈川県大和市のボランティアグループ「やまとアートシャベル」による



シャベラーさんが見守る中、グループで机を合わせ、アートカードでゲーム中。

■ 対話型鑑賞の良いところ ■

対話の訓練にもなり、 答えの無い問いを 考え続ける力を育む

NPO法人 芸術資源開発機構 (ARDA)
代表理事 三ツ木 紀英さん



ARDA は社会の中の新しいアートの役割を、探求し実践している NPO です。対話型鑑賞を手がけるようになったのは、2011 年の東日本大震災がきっかけでした。震災の 3 ヶ月後から宮城や福島に入り、子どもたちとアーティストのワークショップを開催する中で、仮設住宅に引きこもってしまう人たちや原発をめぐる地域の分断や対話のできない複雑な状況も目の当たりにしました。様々な情報を元に自分でみて考え、異なる意見も聴き合い自分なりに判断する力、率直に話し合うコミュニティを、対話型鑑賞で育めるのではないかと考えました。

VTS は、答えの無い問いを考え続ける力を育むと言われています。「どこから?」と繰り返し聞くことで、論理的に語る力、語彙力や読解力、コミュニケーション能力も向上していきます。アメリカでは、この授業を年 10 コマずつ美術館と学校で行うことが推奨されています。現在協働している学校では年 1 回ですが、できるだけ効果が上がるよう、事前にコーディネーターが学校の先生と話し合い、VTS の考え方や対話の仕方を知ってもらいながら、授業に取り入れやすい形を提案するなど工夫をしています。

昨今の子どもたちは、被災地に限らず、自然からも隔絶され、自分の感覚に思いを寄せる時間も失いがちです。主体的に考える力を育みづらい環境に置かれているとも思います。VTS が自分の目でみて深く考えたことを率直に表現し合えるきっかけになることを願っています。

授業を見学しました。大和市の「対話による美術鑑賞事業」は図工の授業時間内に、19 校ある市内全ての公立小学校を一年で巡回しています（おもに 4 年生対象）。

ボランティアのメンバーは先生ではなく、子どもたちから「シャベラーさん」と呼ばれます。VTS を元にした対話型鑑賞をサポートする団体は現在いくつかありますが、大和市も NPO として先駆けの ARDA が、市と教育委員会と協働しながらサポートしています。

授業は 2 時間で、シャベラーさんの自己紹介の後、「作品の見方はそれぞれ違っていい。だからこの時間はみんなが

作品について感じたこと、思ったことに間違いはありません!」と趣旨の説明がありました。知識を問われることなく、のびのび発言していることがわかり、子どもたちの意欲も高まります。

アートカードを使って

授業はここから 2 教室に分かれて行われました。1 時間目は、4 人グループで、アートカードを使って、ゲーム感覚で作品を鑑賞します。各グループにはシャベラーさんが 1〜2 名付き、発言を聞き取って受け止めてくれます。「なっとくゲーム」は、3 枚のアートカードの共通点を見つけながら、小

特定非営利活動法人

芸術資源開発機構 (ARDA)

アーティストによるワークショップを柱に 2002 年に設立。アーツ x ダイアログ (対話で美術鑑賞) 事業は 2011 年に開始し、コミュニケーションの育成や鑑賞プログラムの企画実施を行うことで、社会にアート・コミュニケーションの場を創り出しています。東京都港区、西東京市、佐倉市立美術館、神奈川県大和市、平塚市美術館などと協働しています。

<http://www.arda.jp>



やまとアートシャベル

神奈川県大和市の市立小学校で「対話による美術鑑賞」の授業を2011年から行っているボランティア・チームです。「アートシャベル」という名前には、アート作品を見て思ったこと、感じたことをみんなで「喋る」ことと、作品の魅力や感じる心を「シャベル」で掘り起こすという2つの意味が込められています。

活動は時期によって異なりますが、月2～4回程度（最初の1年間は毎月研修あり）。場所はおもに市内の小学校や近隣の美術館です。一般の方を対象にした「おしゃべり鑑賞会」も実施しています。

やまとアートシャベルでは、現在8期生を募集中です（6/15 締切予定。選考あり）。下記の日程で体験会も開催され、活動内容の詳しいご紹介もあるとのこと。

日程などは変更になる場合もありますので、最新情報を下記ウェブサイトでお確かめの上、ぜひご参加ください。

アートでおしゃべり!体験会

① 5/25(月) ② 6/3(水)

両日とも 10:30/13:30

場所：大和市文化創造拠点シリウス

*予約は不要です。

*日程などは最新情報をご確認ください。

お問い合わせ：大和市文化振興課

<http://www.city.yamato.lg.jp/web/shakai/kansho.html>

2時間目は電子黒板に映された作品を見て、気づいたこと、感じたことを発言します。2作品を15分ずつ、ファシリテーターと対話しながら鑑賞しま

対話による鑑賞

「物語づくりゲーム」では、3枚のカードを使って一人ずつ短いストーリーを作ります。作品の特徴を捉えた自分なりの解釈で、それぞれが物語を紡いでいきます。作品の何を捉えてどんなふうに物語を組み立てたのか、シャペラーさんが問いかけてくれるので、グループ全員でイメージを共有できました。

その後クラス全員が教室の席に戻り、対話を通してどんな作品だと思ったのか、今度は文で表現します。ご家庭でも体験できるような、作品写真入りのワークシートも配布。授業の最後に「皆さんの授業ではあまり発言しないけど、たくさん発言できた」「一つの作品から全然違う意見がたくさん出て驚いた」など、子どもたちからは、多様性の受容や自己肯定感の向上にもつながっていきよくな感想が寄せられていました。



今回取材した美術館と学校の対話型鑑賞会では、どちらも対話の密度が濃

く、鑑賞を終えた参加者のすっきりとした表情が印象的でした。ARDAの三ツ木さんによると、対話型鑑賞会を行う美術館がまだ多くない要因の一つが、美術館では静かに鑑賞したいという来館者から求められる規範だそう。閉館日や特別な日程で行う美術館もあるとのことでした（佐倉市立美術館では、他の来館者に配慮した声掛けがされていました）。そして支えるボランティアの皆さんの

澆刺とした姿に目を見張りましたが、身辺の変化で継続が難しくなる方もいて、継続的な募集が必要とのこと。ビジネス界でも注目の対話型鑑賞ですが、市民が担う対話型鑑賞は、個人だけでなく、学校や美術館にも活力をもたらしていることがわかりました。